

全十勝地区農民連盟の委員長を6期12年務めた山田富士雄氏(65)が、6日の総会で退任した。山田氏にこれまでの農民運動への思いなどを聞いた。



<やまだ・ふじお>
1950年帯広市生まれ。市泉町の畑作農家。2003年から全十勝地区農民連盟委員長を12年務めた。08年から務める北海道農民連盟委員長も、12、13の両日に札幌市で開かれた総会で退任した。

—25年間の農民運動を振り返って。

農民運動を始めたのは1980年代の牛肉・オレンジ自由化、GATT(関税と貿易に関する一般協定)ウルグアイラウンドのころだった。メキシコや香港など、自由化に反対する民間団体の国際会議やデモ活動などにも参加した。

農民運動も時代とともに変わってきた。戦後まもなく、道農村建設連盟から始まり、47年に「農民党」という党をつくり、北海道から政治家を送り出した。農地解放の時代、新しい農民のための政治が必要で、農業者の声を政治に反映させてきた。

農民運動に関わった最初は、米価、麦価、畑作3品(大豆、ビート、でんぶん原料用ジャガイモ)、乳価など価格闘争。

価格から政策闘争へ

現在は、価格闘争から政策闘争に変わり、農民運動が見えにくくなった。55年体制以後、農民運動は政治的にどう立場を取るかが課題となり、政治活動は一党一派に

偏しないとした。十勝にある16組織では「協議会」という名の組織もあり、政治色をなくすため、「書記長」ポストを幹事長と呼ぶ組織もある。

25年も農民運動に携われたことは自分の財産。農民運動の大切さ、組織の大切さを機会があれば話していきたい。

—これまでの成果は。

農家の経費削減につながったことでは、7年かかってトラクターを大型から小型特殊自動車とし、車検をなくしたことがある。整備工場を持つJAは車検がなくなると困るのでできなかったが、農連だから運動ができた。これからも農家の経費削減に貢献することを、やっていかなければ。

2008年には資材高騰対策として、札幌市で7000人規模の集会を開いた。何とか対策に結び付けることができたのでは。

どう生産し分け合うか

—今後の農業をどうみるか。

50年には90億人に達する世界人口の中で、食料をどう生産し、どう分け合うのか。飢餓人口は8億人。先進国の中で食料自給率を下げてもいいという国は一つもない。

日本は時代遅れの農業をしていると言われるが、それは違う。最新の技術を使い、与えられた条件の中で頑張っている。農業は城の石垣のようなもの。同じ石ばかりでは倒れやすい。大きな石、小さな石、それぞれ特色のある農家が構成しているから成り立つ。

十勝農業関連主要記事見出し一覧

2014年3月1日～15年2月28日の十勝毎日新聞に掲載された記事からピックアップ。「農業新技術」に掲載された記事は除いています。日付は紙面での掲載日。記事は勝毎電子新聞でも見ることができます。

▷ 生産畑作 ◁

- 2014/ 4/16 枝豆販売好調、過去最高ペースに JA中札内
- 2014/12/30 川西長いも収量2割増に 新品種に切り替え
- 2014/11/18 和稔じよ品種登録から10年 JA幕別

▷ 生産酪農 ◁

- 2014/ 3/22 全国1位は帯広の杉浦さん 2013年「スーパーカウ」ランキング(農業ガイド)
- 2014/ 4/ 3 中小酪農家も乳価値上げ切望 「再生産可能な乳価を」
- 2014/ 4/29 協議会設立で酪農効率化 哺育・育成牛受託組織
- 2014/ 6/14 生乳出荷停止、無借金でも決断 JA道中